

Title	著者リプライ：「創発するコミュニティ」の可能性：伊藤氏の書評に答えて
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.185- 187
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「著者リプライ」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

 著者リプライ

「創発するコミュニティ」の可能性——伊藤氏の書評に応えて——

吉原 直樹

畏友伊藤守氏の拙著書評に接して多くのことを学んだ。それとともに、拙著が抱える課題が浮き彫りになった。「フクシマ本」の氾濫のなかで唯一手堅い実証に裏打ちされたマジメな本であるとは、あるタブロイド版の日刊紙の拙著にたいするブックレビューの一コマであるが、もともと拙著は新書企画として立ち上がった。しかし編集段階で当初の紙数を維持したままで、いわゆる「専門書」という位置づけに変わった。したがって、この段階で膨大な聞き取り調査から得た知見を入れ込むべきであったが、諸般の事情でそれはかなわなかった。そこで可能な限り、全体を通底するテーマの開示と論理構成の明確化につとめた。本書は基本的に、筆者がこの間こだわってきた「創発するコミュニティ」概念の理論的、経験的可能性をフクシマをフィールドにして検証しようとするものである。同時に、同じ日常的生活者として被災者／避難者たちと存在論的に向き合うことによって感じ取ったかれら／かの女らの思いをすくいあげることに照準している。評者は、筆者のこうしたスタンスを拙著をつらぬく基調音とともにきわめて鋭敏な筆で浮かび上がらせてくれた。そして何よりもありがたいことに、拙著が抱える課題をきわめて明晰なかたちで筆者に示してくれた。

拙著の理論的環をなすコミュニティにかかわらせていうと、「あるけど、ない」コミュニティ状況が実は「ないけど、ある」状況と裏表関係にあることが、その後の聞き取りで明らかになった。詳述はさておき、「元あるコミュニティ」、「従前のコミュニティ」が3・11以前において、「原発さまの町」における町民の個人主義的生活様式の進展とともに空洞化／形骸化していたこと、ところが3・11以降、そうした個人主義的生活様式の只中から、「元あるコミュニティ」、「従前のコミュニティ」の衣鉢を継ぐ国策自治会を相対化するサロンが立ちあらわれていることを一体として／継起的にとらえるなかで、そのことを認識するようになったのである。しかし評者がいみじくも指摘しているように、拙著ではその「実相をより多くの指標で論証する作業」が十分になされていない。このことは、拙著のタイトルのキーワードとなっている「原発さまの町」の構造的な特質をたしかめるうえで、また拙著を通底する「創発するコミュニティ」概念の理論的深化と応用的可能性をさぐるうえで避けて通れない。ちなみに「創発するコミュニティ」概念は、拙著以降の論の展開において、脱「定住」をメルクマールとする「コミュニティ・オン・ザ・ムーブ」の理論的環をなしている（吉原 2015）。つまり筆者が考えるコミュニティ・パラダイム・チェンジにとって不可欠のものなのだ。

だがそれにしても、この間のある種の色調を帯びた復興景のありようが気になる。どうみても避難者の生活再建を後回しにしているとしか思えないような「復旧」、「復興」が目につく。

吉原直樹「著者リプライ」

『三田社会学』第20号（2015年7月）185-187頁

被災者／避難者が新自由主義的な災害資本主義の篡奪の対象となっているのである。とりわけ目を引くのが、このところ鳴り物入りで立ちあられている「福島国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想」である。それは復興の牽引役を謳いあげながら、「新しい産業」、「新しい雇用」の確立の先に「2022年」を見据えたグローバルな産業連関の形成をもくろんでいる。そこでは除染、そして避難者の帰還が避難者の生活再建というよりは、むしろイノベーション・コースト構想、あるいはそれとリンクした復興構想を下支えするものとして推進されようとしている。

他方、被災自治体はといえば、自治体消滅の危機を回避しようとして、自らの復興構想をイノベーション・コースト構想に積極的に位置づけようとしている。またメディアはといえば、イチエフは未だ収束していないにもかかわらず被曝の危険性よりは除染の効果＝線量の低減を報じ、「安全」を「安心」にすりかえて帰還をすすめる国の方針に忠実に寄り添いながら、イノベーション・コースト構想をバラ色に描くのである。そこでは、ある種の「専門家」を動員して作りあげた指標とか数値等が重要な役割を果たしている。こうして、評者が冒頭でかかっている放射能汚染の実態解明を集団的にまさに層として忌避し、「前に進むこと」も「後ろに退くこと」もできない避難者の窮状から目をそらす事態が生じている。それにたいして、避難者の側では、先に一瞥した個人主義的生活様式をなおも保持するなかで、一部メディアに焚き付けられた納税者意識によるバッシングにさらされるとともに、賠償・補償をめぐる上からつくりだされた分断の罫に自らはまり込もうとしている。

4度目の3・11を経て、避難者の棄民化をすすめる「復旧」、「復興」がますます勢いを得ている。この1年ちょっとのあいだに、避難者の生活再建への道のりはいっそう険しくなっているように見える。そして筆者自身、避難者がまとまるのではなく、むしろ離散がすすむ現実を目の当たりにして、拙著が「創発するコミュニティ」をもって示そうとした状況は、いったい何だったのだろうかという思いにとらわれている。フクシマの現実をしっかりと見据えて、先に触れたようなコミュニティ・パラダイム・チェンジを想到するなどといったことは、おおよそ絵空事にすぎないのだろうか。だとすれば、拙著でとりあげた「サロン」(4章)、「大熊町の明日を考える女性の会」(5章)をどのような理論枠組みで、どう定位すればいいのであろうか。いずれにせよ、目の前の現実を直視すればこそ、評者が示唆する拙著以降の課題の重さにおののかざるを得ないのである。

「あとがき」で、筆者が避難者と向き合う聞き取りの作業は2巡目に入っていると述べた。現在、その作業は3巡目に入っているが、とても評者が期待する「調査の全貌を結晶化」する段階には至っていないし、その見通しもまったく立っていない。課題の重さだけが筆者の頭のなかで空回りしているのである。とはいえ、この段階でみえてきているものもある。一つは、上述した復興景の裏側でそれに組み込まれながらとらえかえすような動きがみられることである。たとえば、中間貯蔵施設用地の取得をめぐる上からの価格設定にたいして、地権者と非地権者の間で複数の地域にまたがる協働／協同の枠組みができあがり、それを契機にして「創発

するコミュニティ」への新たな回路が切り拓かれつつある。注目されるのは、そうしたものが「元あるコミュニティ」、「従前のコミュニティ」とは直接交差しないうところで、いわば異階層、異主体が交わる地層において立ちあらわれていることである。いま一つは、いちはやくフクシマを離れて遠くへ行った避難者たちが「外の人」たちの納税者意識を共有する世界に身を置きながら、つまり「外」にいながら「内」と共振する地平を拡げていることである。ここでは個人主義に根ざしながら、「定住」を与件としない、外に開かれた「創発するコミュニティ」の内質が形成されつつある。いずれにせよ、拙著で言及した「サロン」より一步すすんだものがみられるようになっているのである。

けれども、筆者はこのみえてきているものに過大な期待を寄せることは避けたいと考えている。それらは個人主義的生活様式に底礎しているゆえに容易に先に一瞥した復興景に包絡されてしまう可能性／惧れがあるからだ。そしてそのことは、「創発するコミュニティ」が外に開かれた共在的な社会的相互作用のパタンと多元的なかたちの「現前」にもとづく社交性にねざすものであればこそ、不確実性、偶発性、あるいは予測不可能性をともなわざるを得ないことと密接に関連している（Urry 2007=2015）。ともあれ、評者の指摘する拙著以降の課題の重さにおのきなながら、今後とも、避難者への聞き取りを通して「創発するコミュニティ」の理論的境位を問い続けるとともに、その実相に分け入りたいと考えている。そして避難者の生活再建、生活の自立をけっしてノミナルなものにしない、もう一つの復興のありようを（避難者とともに）模索していきたいと思う。

【文献】

- 吉原直樹.2015.「コミュニティ・オン・ザ・ムーブ——破局を越えて」吉原直樹・仁平義明・松本行真編著『東日本大震災と被災・避難の生活記録』六花出版.500-517.
- Urry,J., 2007, *Mobilities, Polity*. (=2015.吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ——移動の社会学』作品社.)

(よしはら なおき 大妻女子大学)